

# にわとりと共に生きて

— 開拓農民桜井昭人さんの想い —



鈴木 勇子 著

ゆい 双書



にわとりと共に生きて

— 開拓農民桜井昭人さんの想い —

農場の生活

4

農業史

8

(1) 開拓時代

8

(2) 近代農業時代

16

(3) 有畜複合経営への転換

22

使い捨て時代を考える会との出会い

栽培法の転換

信頼関係を作る

価値観の見直し

家計にとっての自給の意義

生家にいた頃

緊急開拓事業

入植を決意

共同体

酪農とスイカ

酪農の行き詰まり

換金作物スイカ、じゃがいも、大根

第二次振興計画

電子技法栽培の教訓

近代農業の行き詰まり

出稼ぎの道に入りかける

市場に嫌気がさす

養鶏法

28

(1) 養鶏歴

29

(2) ヒナを入れる準備

33

(3) 育雛

40

- ① 育雛器具  
育雛器（フルーダー）  
チックガード  
給水器  
ムシロ  
その他

種鶏養鶏を始める  
採卵養鶏への転換  
再び種鶏養鶏へ  
消費者と契約する

(4) 成鶏

47

- ① ヒナの餌  
小米の上におろす  
卵黄消化期  
小米とササの葉

(5) 卵

57

- ① 鶏糞堆肥
- ② 鶏舎の構造
- ③ 餌やり  
自家配合飼料と緑餌  
切れ餌とその効果
- ④ 止まり木
- ⑤ 移動は一回
- ⑥ 季節の野菜
- ① 産卵  
タンパク質  
点灯はしない  
産卵箱  
採卵
- ② 卵価
- ③ 淘汰
- ④ 尻つき対策
- ⑤ 暑さ対策
- ⑥ ヒナの健康
- ② 発酵熱の利用  
一週間前の準備  
前日の準備
- ③ ヒナが到着する日  
水飲み場を教える  
夕方のしつけ

まとめ

62

## 農場の生活

滋賀県栗東町<sup>りつとう</sup>浅柄野<sup>あさがらの</sup>、南山地区と呼ばれるところの一角に桜井昭人<sup>あきと</sup>さんの農場がある。母屋、息子さん一家の家、作業場、鶏舎が中央にかたまり、水田、畑が隣接する。総面積は、二町一反程。農場に住んでいるのは、昭人さん、妻のもりえさん、長男の常人<sup>つねと</sup>さんと妻の由香さん、孫の菜香<sup>さいか</sup>ちゃんと賢人<sup>けんと</sup>くんの六人だ。そして鶏番の犬一匹と鶏九〇〇羽がいる。

農場では、およそ八〇種類の作物を栽培している。作物は全て自家用であることが基本になっている。農家で余ったものを消費者に供給し、換金作物は作らないという考え方だ。また受け手のことを考えても多品目作付になってくる。効率を考えて一つの作物を大量に作ったら、消費者は引き取りきれなくなってしまうからだ。

野菜の栽培、出荷は常人さんが一手に引き受けている。昭人さんは、野菜のことは決して口出ししない。それが農場をいっしょに経営していく上で、うまくいく秘訣だ。

収穫は常人さんが早朝行い、その日のうちにもりえさんと由香さんがゴミや変色した葉を取り除き、分けて重さを計る。それを常人さんが束ねてコンテナに入れ、翌日、安全農産供給センター（後述）の職員が取りに来る。

最近、葉物の野菜は雨よけ程度のハウスを使わないとできないようになった。酸性雨にあたると病気や虫に対する作物自体の抵抗力が弱ってしまうためだ。

## 〈滋賀県〉

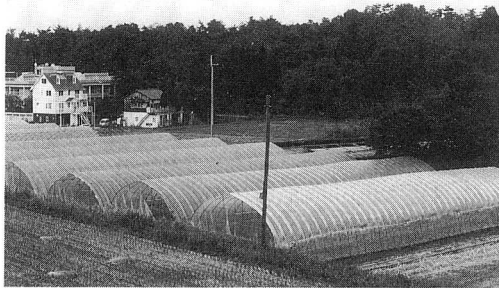


以前と変わってしまったことはまだある。農薬を撒かないで栽培する工夫として、白菜、大根、かぶらなどは気温が下がって虫がいなくなつてから植えるようにしていた。ところがこの頃は、気象の変動が激しいというか、秋が深まってもちっとも寒くならず、いつまでも虫がいて苦勞している。

昭人さんが受けてもっている仕事は、養鶏と米作りだ。養鶏については、後で詳しく紹介する。水田面積は、七反程。六月、カブトエビが発生するちよつと前に田植をする。そうするとカブトエビが除草してくれるので助かる。しかし、それだけでは足りないので一回だけ除草剤も使っている。以前は、まったく除草剤を使わず除草機で除草をしていたが最近は何がつかないかなくなつたからだ。肥料は油粕の他に化学肥料も少しだけ使っている。養鶏から得られる鶏糞の堆肥は、畑へ入れる量しかない。畑のほうが主力なので仕方がない。

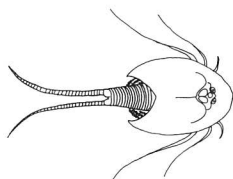
家の周囲には、様々な果樹が植えられ大きく育っている。秋グミやナツメなど故郷の信州からもつてきたものもあり、四季の味、懐かしい味を楽しめるようにしてある。果樹の剪定や摘果は、昭人さんの仕事だ。キウイの棚を木組みで頑丈に作つたりもする。

昭人さんが玄米菜食を始めてからずいぶんたつ。自家製の玄米に黒米、煎った大豆を入れ



雨よけ程度のハウス





※カブトエビ

一ヶ月くらいで卵になっていなくなる。四八対の足があり、それで水を掻き回すので水が茶色く濁り、除草効果がある。草も食べる。別名、草取り虫ともいう。

作 付 一 覧	稲	うるち米（日本晴、コシヒカリ）、もち米（羽二重もち）
	麦	小麦、エン麦（飼料）
	いも類	じゃがいも、さつまいも、やまいも、さといも
	根菜類	青首大根、山田大根、日の菜、かぶら、人参、ごぼう、しょうが、菊いも、ウコン、ヤーコン
	ねぎ類	九条ねぎ、玉ねぎ、にんにく、らっきょう、ニラ
	豆 類	大豆、落花生、三度豆、グリーンピース、ササゲ、ハブ草、エビス草
	果菜類	スイカ、キュウリ、ナス、ピーマン、伏見長トウ、トマト、イチゴ、辛長トウ、オクラ、スイートコーン、ポップコーン、ハト麦、ブルーベリー、ブラックベリー、蕎麦、かぼちゃ
	葉菜類	白菜、ほうれん草、菊菜、小松菜、ブロッコリ、サニーレタス、水菜、タイ菜、チンゲン菜、みょうが、アスパラガス、シソ、ウマイナ、エンサイ、キャベツ、三ツ葉
果 樹	柿、栗、ピワ、イチジク、カリン、キウイ、桃、梅、ナシ、みかん、春グミ、秋グミ、ナツメ、キンカン、スタチ、イチイ、山桃、くるみ	
その他	しいたけ、さんしょう、タラの木、オーチャードグラス（飼料）	

て炊く。これが何ともおいしい。よく料理もする。得意なメニューの一つは、じゃがいものうんと小さいのを皮付きのままゆでてさまし、油でゆっくりいためてから味噌をからめる料理。信州で子供の頃食べたおやつからヒントを得て、供給するには小さすぎるじゃがいもを生かした超アイデア料理だ。ふきのとうなどの野草を摘んできて料理するのも得意だ。雨が多く緑の豊かな日本の地は、野草の種類も量も豊富だ。地下資源は少ないが地上の資源大國だというのが持論だ。

## 農業史



### (1) 開拓時代

#### ・生家にいた頃

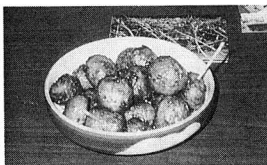
桜井昭人さんは、昭和二年、長野県下伊那郡清内路村せいないじに養蚕農家の長男として生まれた。



家族と友人たち



くつろいで料理する  
昭人さん



じゃがいもの超アイデア料理

清内路村は、米のとれない山間部の貧しい村だった。急な坂道ばかりなので、薪や米、郵便物、いつでも何かを背負わされ、空っぽで歩かせてもらったことはなかった。それがどうしても嫌で何とか逃げ出してやろうと考えるようになった。

尋常小学校六年生のとき、長野県が満州開拓の移民を募るために撮影した八ミリ映画を見た。舞台は赤石山脈と伊那山脈の間に位置する大鹿村。高い山で左右をはさまれ日が当たらず、地層が新しいため石だらけで作物が育たない、貧しい信州でも特に貧しい村であった。

大鹿村を撮影したねらいは、長野県が農業には適さない大変なところだというのを見せることだった。そして次の舞台は、満州の大平野である。果てしなく続く肥沃な大地で、どんな作物でも素晴らしい収穫が得られることを宣伝した。

清内路村が大鹿村と大差のないことは、よくわかった。自分の故郷はそれほど悪いところなのかと思い、抜け出すことをいつそう真剣に考え始めた。

太平洋戦争が始まり昭和一七年、村を出ようと思い海軍に志願した。軍人になると言えば両親も反対できなかったからだ。海軍特別少年兵一期生となり、主計兵として栄養学を勉強させられ、主に炊事を担当した。

一五歳から二〇歳までの多感な少年時代にラバウルでの飢餓や砲撃、マリアなどを体験した。「すごいですよ。飢餓というのはね、本当に大変だよ。もう、どんなものでも食べないかんもんな。本当の飢餓状態を見て帰って来たっていうのが、安全な食べ物を作りたいということにつながっているんです。」

#### ・緊急開拓事業

終戦直後の食糧不足時に国の緊急食糧増産対策の一環として、緊急開拓事業が開始された。桜井さんが入植することになる浅柄野開拓地はそのうちのひとつで、そこには昭和二一年六月、最初の九人が入植し、浅柄野開拓協同組合が組織されていた。当時の浅柄野は、切り株だけが残る原野だった。組合員相互の結束は堅く、開拓精神と農業の理想に燃えていた。戦争により混乱した日本を農業によって再建しようという空気が全国の農村に流れていた時代であ

る。

二年後の昭和二三年までに約三〇人が入植した。しかし実際には、ほとんどの人はあまりの困難さに開拓を断念し浅柄野を後にしていたのである。戦後の開拓事業は、入植者の約八割が落伍したといわれる。

なぜ、それほどまでに開拓は困難を極めたのだろうか。

戦後開拓事業の目的とは、国側にとっては、食糧増産のための緊急対策であった。つまり長期的な経済展望の上にてたてられた農業政策ではなかったのだ。そのため開拓地の選定、入植者の選考、営農計画などにおいて十分な対策が取られていなかった。その上、基本的条件となる道路、飲用水、灌漑<sup>かんがい</sup>用水などが全く準備されていなかったことが入植者にとって大き

## 〈長野県〉



な苦痛と障害になった。

このような悪条件に加え、入植にあたっての県との契約は厳しいものだった。一人（戸）当たり約二町の原野が払い下げられ開墾補助金と住宅補助金をもらう。ただし五年以内に全てを開墾しつくさなければ追放される、という条件付きだったのだ。

機械力のない当時、二町余りの原野を五年以内に開けというのは、相当に無理な注文であった。開墾ばかりしていると生活費に困る。しかし、日雇いに出れば開墾は進まない。開墾したばかりの土地に生産力はなく、自分の食べるものすら満足に収穫できなかった。こうした状況の中で、ほとんどの入植者は落伍せざるをえなかったのだ。

#### ・入植を決意

戦争が終り清内路村に帰っていた桜井さんは、滋賀県が浅柄野開拓地への補充入植を募っていることを知った。視察に行つて入植を決意し、清内路村から長男ばかり三人の仲間を集めた。

清内路村と浅柄野を比較してみた。農業にとって重要な地理的条件、気象条件だけではどんなに努力しても変えられない。浅柄野は、京阪神という大消費地に近く、気候も温暖であった。また土地には限りがあり、開拓地のあるときに行かなければ新しい土地へは移れない。どうしても浅柄野に入植するほうが農業をやる上で有利であると考えた。

#### ・共同体

昭和二六年三月、当時二四歳だった桜井さんをリーダーに四人は浅柄野開拓地南山地区へ

入植した。新農村、理想郷建設の夢に青春の全てをかける意気込みだった。先に入植していた人たちの苦勞を知り開拓がどんなに困難かを承知していた四人は、一つの作戦をとった。最初の一年間だけという約束で財布一つの共同体をつくり、四つの開拓地を共同で開墾することにした。まず、共同宿舎を建てた。それから順番に一人が日雇いに出て生活費を稼ぎ残る三人は開墾に励んだ。こうして生活費の心配をすることなく開墾に集中できたことが成功の鍵だった。一年後、一人は共同宿舎を引き継ぎ、三人は個人住宅を建設。共同体は解散された。

昭和二十七年一〇月、同じく清内路村出身の桜井もりえさんと結婚した。村を出る前から決めていた相手だった。当時、山の反対側の既存農家から水田を借りていた。そこへ二人で稲刈りに行ったのが新婚旅行だった。

もりえさんが嫁いできた頃

「何もないところ。小屋が一軒あるだけ。それでも今考えてみれば、(開拓)できたということは、戦争で厳しい生活に慣れていたのでしょね。だからできたと思うけど、今みたいな裕福な生活に慣れていて行ったらなかなかできん

やろ。いろいろものがないということには、戦争中に慣れていたからね。(野菜など)なかなかできないだよ。市場へ出せるようにものを作るのは大変だったな。さつまいもが最初かな。そんなもんしかできないんだ。」

## ・酪農とスイカ

浅柄野は、丘陵地をけずった砂質の痩せた土地で、開墾を進めながら有機質を大量に投入する必要があった。当時、協同組合で飼育していた馬、和牛、乳牛、やぎ、豚等家畜の糞は貴重な肥料であった。また牧草による土壌改良も行われた。当初は、有機肥料の不足で苦勞した。昭和二〇年代後半までは、さつまいも、じゃがいも、大麦、小麦、ナタネの栽培に重点を置いていた。しかしその後、全国的に食糧事情が好転したため、開拓課の指導で酪農中心の農業経営を目指すことになった。

浅柄野は、土地面積が広く牧草が豊富だったので酪農に適していた。昭和二九年には、すでに全戸に乳牛一〜三頭が飼育されていた。

「最初の乳牛は、それ一頭だけだったから、ほんまに可愛がった。どこへ行くにも連れて行っただよ。雑種だったけれど滋賀県のコンクールで一等になった。一度ね、前の晩、遅くなったせいで、眠いのを我慢しながら乳絞りをしていたら、うっかりそのまま居眠りをしてしまった。牛の乳に顔をつつぷして寝ていたら、うちのもんが様子を見に来て、起こされた。あの牛はね、どんなことがあっても足を動かさなかった。牛に蹴られたら、痛いなんてもんじゃない。可愛がってやらないと、こうはならないんだよ。」

またもりえさんは「牛を飼って乳がでるようになったときは、お金が入るから嬉しかった」と話す。

当時、浅柄野で収入になるのは牛の乳だけだった。



〈全国の乳牛の頭数〉

	昭和35年 (1960)	昭和40年 (1965)
乳牛の頭数 (千頭)	824	1289
飼育農家数 (千戸)	410	382
1戸当たり の頭数	2.0	3.4

出典『農学大事典』

その後も日本の畜産経営は、ひたすら規模拡大の方向に進んでおり、小規模経営の酪農家は消えていった。

またスイカも昭和二〇年代後半に作付を始めた。スイカは新しい土地だとよくできる作物だ。嫌地現象がなく、病気もないためだ。四、五年後には浅柄野はスイカの産地として京都市場、大津市場に名が通るようになった。

スイカの選別は、指ではじいてその音でスカスカしていないか、熟しているかを判断する。最盛期には、はじきすぎて指が倍くらいの太さに腫れてしまうこともあった。どれだけ神経

を使っても、はずれてしまう時もあった。一つでもはずれが入れば浅柄野全体のスイカの評判を落してしまふ。市場へ出荷するための選別は、とても神経を使う難しい作業だった。

こうして酪農をやるかたわらスイカが急成長したが、それにさらに秋作の大根が加わった。昭和三三年になると前年は組合全体で一七反だった大根の作付が一気に五〇反になり、年を追うごとに全体の作付面積は増大していった。

#### ・酪農の行き詰まり

昭和三五年頃から飼料代が値上がりする一方で乳価が低迷し、多頭化飼育でないと採算が取れなくなってきた。また、近代農法による蔬菜そさいの作付面積拡大で、労力的にも無理が出てきた。乳牛がないほうは蔬菜に集中できるといわれた。このため浅柄野で酪農をやる家は減っていき、桜井さんも昭和三九年、酪農をあきらめ養鶏を始めることにした。

### (2) 近代農業時代

「近代農業というのは、専門的な技術で一つの作物を大量に長期間出荷する。そうして市場性を高め産地としての地位を築き、他の産地との競争に勝ち抜くこと。今までみたいな麦や芋なんかいらぬから、もっと金になるものを作れって言われたのが昭和三五年から四五一年の一〇年間。一般には、今でも続いているね。」

・換金作物スイカ、じゃがいも、大根

組合の営業部販売係となり、市場での産地浅柄野の売り込みに努力した。酪農に代わり、スイカ、じゃがいも、大根が浅柄野の主力となった。「この切り替えもうまくいって、何とか浅柄野に定着するようになってきた。だけど、近代農業になってどんどん作付面積が増えていくのは、ものすごく大変なんだよ。」

最盛期、桜井さんは秋作に一〇反の山田大根を作っていた。山田大根は、一反歩で一万本できる。それを一〇反作ったのだから、一〇万本。これを一ヶ月で出荷するためには、どうしても人を雇わなければできないが、一反から当時三〇万円ほどの大きな収入になった。これは素晴らしいということで、大勢の人を雇い、規模を拡大していった。「この山田大根を作ったときに最も盛んだったんだよね。」浅柄野協同組合全体で京都市場に三分の一のシェアをもつまでに成長した。

昭和三五年には、夏作のじゃがいもの販売を拡大するために神戸から船で台湾へ輸出したりした。「組合で浅柄野全体をどうやって有利にしていくかということを生懸命考えた。というのは、商品作物だから。いかに高く売って、いかに儲けるか、それが全て。市場の相場に一喜一憂して、毎年その繰り返し。」

営農指導係として新しい栽培技術の導入も担当していた。昭和三六年、先進地で見学したスイカの接ぎ木技法を導入した。浅柄野に初めて大きなハウスを建て、張り切った。ところが突然気温が上昇し、そのときの対処の仕方がわからなかった。慌てて一度に戸を開けてみたが、それがいけなかった。しおれてしまったのだ。これは大変だと今度は水をかけたら余

計悪く、炭<sup>※</sup>そ病になってしまった。病気は一気に広がって最低の収穫だった。温度が急に上下するのは当たり前。しかし、新しく習ってきた技術では、どう対処していいかわからなかったのだ。「頭でわかるのと、腹でわかるのは違う。農業技術は、腹でわからないと自分のものにならないね。」

### ・第二次振興計画

全国的に農業の近代化が進み、産地間競争が激しくなってきた中で、浅柄野の小規模経営では取り残されそうになり、危機感が強まった。組合で対策を練り、第二次振興計画と呼ばれる基盤整備に取りかかった。山成り畑を地ならしし、畑に灌漑設備を施した。排水工事もおこなった。そして換金作物をさらに増やすためにトラクターを共同購入した。工事は足掛け三年かかり、昭和四一年、完成した。これによって水稲も作れるようになった。

### ・電子技法栽培の教訓

昭和三八年から四二年にかけて電子農業を導入しようとしたが、失敗。「電子技法栽培をもう、一生懸命やっただんです。わしが張本人で滋賀県にずっと広めて。それが効果がなかったもんで、もう怒られたな。」

電子技法栽培とは、その実践者によれば、炭・水・空気を活用して電磁場の高揚を図ることにより、農薬や化学肥料を使わない安全でおいしい作物を育てることを目指している農法である。例えば炭を畑の中に埋めたり、特別な装置により電子を供給した電子エネルギー水で灌水したり、空気を土壌に注入したりする技術を駆使する。桜井さんも磁場を高めるため

に炭をたくさん埋めた。その効果はよくわからなかったが、理論的には確かにいいと思っている。化学肥料などで土壌が悪くなっているところへコンプレッサーで空気を注入すると臭いガスが出てくる。問題は経費と時間がかかることだ。

「電子技法でこのスイカを徹底的にやったときには、雨ばかり降って全部病気になっちゃった。これはやっぱり農薬かけなあかんよ。」

それに雨がざんざん降っていたらスイカなんてちよっとも売れへん。ただみたいなもの。この家に、もう全部、畳を上げていっばいスイカを入れた。でも家が狭いでしょ。とにかく、この中はスイカだらけだった。その時の情けなさっていったら、ほんまにもう、農薬ってつまらんなど思ったな。どうなるのやろうと。で、しまいに腐ってくるから、みんな捨てなきゃならん。」

しかし失敗に終わっただけではなかった。「電子技法をやってそこでヒントを得たのは、農薬をかけんでもできるっていうこと。初めから農薬散布っていうのは非常に気になっていたから。」

※炭そ病

夏に低温で雨が続き日照不足のときが多発。きゅうり、スイカなどのウリ科野菜を侵害。黄褐色の丸

い斑点ができる。

・近代農業の行き詰まり

浅柄野で水稲ができるようになってからわずか三年後の昭和四四年、米の減反政策が始まった。せっかく安定していた稲作も揺れ始めることになる。日本中が列島改造論でわきたち、高度経済成長の結果、農業と工業の所得格差が増大した時代、近代農業はいよいよ行き詰まってきた。

「大根も連作障害で収量が減ってきた。それと産地間の競争のために洗いだしたんだよ。今までは引いて、くくってすぐ出荷だったでしょ。その方がよかった。しばらく洗っていると水が泥々になるでしょ。その水っていったら大根の匂いがぶんぶんする。養分が出ていってしまう。ところがよく見せるために洗ったら、値がよかった。で、みんなそうするようになっちゃった。ものすごい手間がかかってしまう。

それと、一町歩も大根やっていたら家族労働ではできないから人を雇わないかん。その雇える人が時代と共にいなくなってしまう。」

・出稼ぎの道に入りかける

栗東トレーニンクセンターと草津工業団地、そしてゴルフ場が三か所もできたことで、今まで頼りにしていた近隣からの人手がなくなってしまうのだ。もう農業はやめて工業中心でやったらいじゃないかという雰囲気だった。

規模を縮小せざるをえなかった。「機械化したところで、機械っていうのは、悲しいことに全部してくれない。大根を引いてきて、洗ってなんてしてくれないからね。」だんだんつ

ぶれかけてきた。兼業農家になったり、離農する家も出てきた。周りの農家がどんどん出稼ぎに出て行くのを見て、一時は栗東トレーニンクセンターで働いたことがあった。

浅柄野開拓二〇周年の文集にはこう記している。「入植一〇年頃から、中だるみでもいうのだろうか。当初の意気込みが大きかっただけに疲労も目立ち、子供もだんだん大きくなって生活費も増大し、不安な時期を迎え、それと同時に生産も落ちて、ますます自信を失い、都会に近いという地理的条件の良さがわざわざいして、出稼ぎという道に入りかけた。しかし労賃は高いように思われても所詮は労賃であるのと、開拓者として生きて行く初志の目的に反する自責の念にかられ、心身共に疲労は増大するばかりである。」

・市場に嫌気がさす

中央卸売市場は通常、地方自治体によって開設される。そこに開設者に許可されて卸売会社（卸し）、中卸し業者（仲買人）、売買参加者が入っている。卸しは、原則として出荷者から販売委託された商品を仲買人や売買参加者に公開のセリ、または入札で販売し、売れた価格から決められた手数料を引いて出荷者に送金する。ここでは、今日入荷したものは、今日のセリに上場し、時間内に売り切ってしまうなければならない。

「品物が多いと運賃も出ないような値段になるでしょ。値が高いときは品物がこちらにないから高いんであってね。結局生産者が全部かぶることになって、どうにもならないんだよ。なんで百姓が、そんなに向こうの勝手にされてな。委託やから仕様がないわな。いつも泣いたり、笑ったりせんならん。それがずっと頭に来ていた。向こう次第で値段がただみたいに

なったり、ほんまにあれだけは嫌だったな。なんとかならんのかと思ったよ。」  
 夢も希望も失いかけて「食えない」「儲からない」が口癖になった。

### (3) 有畜複合経営への転換

・使い捨て時代を考える会との出会い

昭和四九年（一九七四）使い捨て時代を考える会と出会った。昭和四八年に消費者によって結成された同会は、安全な卵を供給してくれる生産者を探していたのだ。

それまで消費者とは価格の上下をめぐって本質的に利害が対立する立場にあると考えていた。だから初めは、会の「豊かな工業的繁栄は幻であって続かない、農業を基本として希望の社会を」という考えにまず驚かされた。そして「生産者と消費者が一体となって農業を考えよう」という意見には、非現実的とあきれてしまった。

消費者は信用できないと言うと、「信用できないのは、当然です。都市生活が横暴で身勝手なものでしたから」。そしてさらに「互いに信用できない現実から始め、その現実を少しずつ変えていきましょう」という言葉が会員の一人から返ってきた。この言葉にまいてしまったそうだ。

まだ実績のなかった市民グループを話し合いだけですぐに信用することはできなかった。しかし、価格競争に疲れ、市場に幻滅していた時だったので、これからは消費者と直結だ、と



直感的に考えた。こうして半信半疑ながら、使い捨て時代を考える会に卵を供給することになった。

### ・栽培法の転換

採卵養鶏を始めるかたわら、田んぼと畑のほうも化学肥料、農薬を多量に使う近代農法から無農薬有機栽培に切り替えていった。初めてできた無農薬野菜は、小さくて虫食いがあり、市場で売れるものではなかった。

昭和五〇年、使い捨て時代を考える会は、安全農産供給センターという株式会社をスタートさせた。卵だけでなく、野菜、米、その他の食料品を会員に供給するためだ。この頃桜井さんは、まだ大量に大根とスイカを作っていて、それらも出荷することになった。

その年、大根が大暴落した。大量の大根を出荷できずに困っていると、使い捨て時代を考える会の人達が大根でたくあんを漬けるために駆けつけてくれた。それから一〇年間このたくあん漬は、会の一二月の行事となった。そして会員参加のさつまいも収穫へと引き継がれていった。さつまいもの収穫は現在も続いている。

もりえさんによれば、会を創設した当時の会員は積極的によく畑へ来てくれたそうだ。無農薬で栽培するためには、どんな手伝いをすればよいのか、除草剤の代わりに草取りをする手間がないのならわたしたちがやりましょう、消毒をしないと虫が付くのなら虫を採りましょう、というふうに関わってきた。それが良かった。初めは、連作と化学肥料で畑が消耗していたため満足な収穫が得られず大変だった。しかし、当時は苦労が苦労とは思えなかった。

そうして消費者の手助けを受けながら試行錯誤を繰り返した。

「無農薬でいけると思っても労力的に無理があったり、失敗するかもしれないという不安もある。それでも消費者が手伝いに来てと言って本当に来るから、それじゃやってみよう」と結構な冒険をしたと思う。お互いが助け合って、伸びてきた。」とは常人さんの言葉だ。

現在はそんなに消費者の応援がなくてもできるようになった。二〇年かかって技術ができあがり、地力も回復したからだ。今は、何を作っても良い収穫が得られるようになった。こうなったのは、昔の消費者のおかげだと言う。

#### ・信頼関係をつくる

白い種のスイカを供給してしまった事件がある。会に野菜などを出すようになってまもなくのことで、供給量も本当に少ない頃だった。当時は、まだ大部分のスイカは市場に出荷していた。市場にまわすスイカを先に選別し、残った二級品のスイカを会にまわしたのだ。市場に一番いいものを出すのが以前からの習慣だったし、少量しか引き受けられなかった会との付き合いにまだ本気ではなかったからだろう。

スイカを買った会員の一人が食べようと割ってみると種が白いのに驚き、会の総会でこのことを問題にした。プロの生産者としてスイカが熟しているかどうか判断できないとは、いったいどういうことなのかと。議論の末、桜井さんは会員がいかにか真剣に取り組んでいるのかを知った。これは、大変な消費者だなということがわかってきた。問題は、それをどう受けとめるかだ。会員をあまく見ていたことを反省し、本腰を入れて会と付き合いようになった。

こうして消費者をだんだん信用できるようになると、この人たちにおいしいものを食べてもらいたいという気持ちがわいてきて、もっとよく選別するようになった。「この人たちのためなら、わしは一生懸命作ろうと思うまで四〇五年かかりました。」

一方、白い種のスイカを問題提起した会員もこの事件で大切なことを学んだという。当時はまだ、「わたし、食べる人」という視点からしか問題を捉えることができなかった。関係を大事にしたいという思いが自分中心で、生産者の気持ちを思いやれずに自分の思いだけを生産者に突きつけてしまったと反省する。「生産者の痛みを我がものとする消費者、消費者の痛みを我がものとする生産者」。今は、この考え方を大事にしたいと思っている。

#### ・価値観の見直し

会と付き合おうちに消費者が本当に欲しがっているのは、市場向けの商品作物ではなく「食べ物」なのだ、ということに気がついていった。一大発見だった。そして少年時代にラバウルで飢餓を体験したことから「食べ物」の重要性が思い出され、その重要性を改めて認識するにいたった。

「食べ物だったら、一つの物をどんどん消費者がもらったら、たまったものじゃないからね。それで多品目作付になった。」産地形成のために大量に大根、スイカを生産した近代農業との決別だった。

また、会といっしょに食品の安全性について勉強をした。戦争中に主計兵として現代栄養学を勉強していたため、それまで食べ物に栄養のバランスだけを考えればよいと思っていた。

しかし、安全かどうかが問われる時代になってしまっていたことを知らされた。

「えらいことになったなと思った。これは大変だな。それでどうせ、もうあとたいしたことないんだったら、わしは、百姓として食べ物作りをしようと決めた。よし、これをやろうと。」

「いつも質問するんですけど、食べ物って何ですかっていうと、すつと答える人はあまりいないですね。食べ物っていうのは、生命の糧なんですね。その人が食べて健康でなければいかん。」

自分が作るのは、生命の糧である食べ物で、儲けるための商品作物ではないのだ。この価値観の見直しをしたことが、桜井さんの農業と人生を大きく変えた。

経営形態全てが変わってきた。自給を基本にした有畜複合経営になった。稲ワラは、田にすぎこんだり鶏舎の床に敷く。モミガラ、小米、米ヌカ、クズ野菜、畔草あぜは、鶏の餌になる。鶏糞は、稲ワラと混ぜて鶏舎の中で良質の堆肥になり、畑に入られる。廃鶏も喜んで食べてくれる人たちがいる。いかにうまく有機物を循環させるか、ムダを出さないかが農業の基本だという。

#### ・家計にとつての自給の意義

経営形態を転換させたのと同時に、収入は減った。すぐに納得できたわけではない。しかし循環型の有畜複合経営で、支出が減ったことも確かだ。初めの五、六年は、会の消費者と信頼関係をつくりながら、価値観の見直しをした過程であった。そして農家は、その気にな



袋詰めされた鶏糞堆肥



鶏糞堆肥を畑へ入れる

れば食糧の自給ができるということが強みになった。現在、食糧の八割は自給しているという。  
「金が入らなくても泰然とできるのは、やっぱり価値観の見直しができたからです。私は食べ物を作っていて、売物じゃないんだと言う価値観の見直し。これが大きい。そして理想的な農業を探してふらふらしたけど、最終的に、あ、これだなというのを見つけたら、精神的にもすごく安定しました。」

## 養鶏法

平飼い養鶏には様々な方法があり、生産者それぞれが自分にあつた独自の工夫をしている。自分のやり方に確信をもっている人もいれば、まだまだ試行錯誤しながらやっている人もいる。ヤマギシ式養鶏法や中島正氏の自然卵養鶏法のように多くの人に実行されているものもあるし、このような養鶏法から自分にあつたところだけを取り入れている人もいる。

ここではどのようにして現在の養鶏にいたつたかを含め、桜井さんの実行している方法を紹介する。養鶏を始めて三〇年。失敗、苦労いろいろあつたが一番大切なことは、養鶏を通して「医食同源」を学んだことだ。特にこの一五年で自らの食生活は大きく変わった。玄米菜食で心身共に健康になった。食糧の八割を自給し有畜複合経営になつたのも、養鶏から学んだところが大きい。

技術的に最大の特徴は、尻つき対策である。ヤマギシ式養鶏からスタートしたため、それが今でもベースになつている。鶏がどうしたら気持ち良く健康に暮らせるか考えながら世話をしている。

使い捨て時代を考える会と出会つたことも現在の養鶏法がある大きな要因の一つである。赤玉鶏の平飼い養鶏は一般的な白色レグホンのケージ飼いに比べてどうしても卵価が高くなつてしまふ。それでもなお自然卵の良さを理解し支えてくれる消費者がいることが平飼い養鶏

にとつて最も必要なことだろう。

## (1) 養鶏歴

### ・種鶏養鶏を始める

開墾時代から自家用に鶏を飼っていたが、本格的に養鶏を始めたのは昭和三九年。それまで手掛けていた酪農が、乳価が上がらず行き詰まっていた時だ。酪農から養鶏への転換であった。当時、栗東町で種鶏養鶏をやる生産者を探していた孵化場の経営者と知り合い、四人の仲間とともに契約をし、種鶏養鶏を始めた。

平飼いならヤマギシ式がいいと飼料を扱う業者が勧めるのをきき、ヤマギシ式養鶏の講習を受けた。ヤマギシ式の特徴は、会の言うとおりに養鶏をすれば初めての人でもできるということ。自己流や手抜きをするベテランより、教えられたとおりにする初心者の方がよいと言う。

飼い始めた鶏は、肉用のプリマスロックのメスと、採卵用のロードアイランドレッドのオスで、生まれ\*てくる鶏は卵肉兼用で黒に黄色の羽の混ざったゴールデンネックという品種である。当時、流行した品種であった。

ところが孵化場は経営がうまくいかず最初の契約とは話が違ったこともあり、取引は長くは続かずけんか別れとなった。

### ・採卵養鶏への転換

仕方なしに種鶏養鶏はやめて採卵養鶏を始めた。しかし、今まで飼っていた肉鶏のプリマスロックで採卵をしたため産卵率が低く、うまくいかなかった。そこでヤマギシ会から赤玉鶏※に白色レグホンをかけたヤマギシ三号という採卵用の品種のヒナを入れた。卵は自分で草津市行って引き売りをした。初めに試食をしてもらい、味を覚えてもらおうと毎回買ってくるようになった。消費者に直接売って歩いたことは、自分の努力次第で成果が上がったり、反応がわかるなどして楽しかったという。

### ・再び種鶏養鶏へ

まもなく、全国販売協同連合組合（以下全販連）に養鶏の適地として見込まれて、種鶏養鶏を勧められた。仲間と相談のうえ、採卵養鶏をやめて全販連に加入し、種鶏養鶏を大規模に展開することになった。全販連は農協の連合組織である。寄らば大樹ということで仲間も九人に増え、安心して規模を拡大していった。九人合わせて最高二万羽ほど飼っていた。

またヤマギシ会も良質で安い卵を大量生産するという企業養鶏に力を入れ始めていた時であった。この考え方を講習で聞いていたことから、将来は自分も企業養鶏をするのだと考えつつ種鶏養鶏を拡大していった。まだ鶏を「経済動物」として見ていた頃であった。

全販連には養鶏のための指導要綱というものがあり、指導員や獣医がいて、自分のやりたように鶏を飼うことができなかった。幼雛よちすから育てるのは難しいという理由で中雛ちゅうすから飼育するように指導された。しかし、一番大切な餌付けを他人まかせにすることになるので、



※種鶏養鶏

孵化場でヒナをかえすための卵を採る養鶏で、出荷先は孵化場だ。種鶏養鶏の卵の値を決めるのは受精率だ。産卵されてから一週間後、検卵器にかけて生きているかどうか判別する。当時、受精率は一〇羽に一羽オスを入れて、八〇%から九〇%ぐらいで、成績が良かった。オスをもっと入れれば一〇〇%に近づくだらう。しかし、オスは産卵しないのにメスより多く餌を食べるため、コストがかかる。少ないオスでいかに受精率を上げることが種鶏養鶏の技術なのだ。

※ヤマギシ会

「組織的には、ヤマギシズム賛同の人たちによる山岸会会員組織があり、農業方面だけでなく都市生活者も多く、九州から北海道までの全国組織である。会員の中からヤマギシズム実践の有志が何家族か集まり、全国各地に点在して、財布一つの一体経営、一体生活の

村づくりをしている。ここをヤマギシズム実顕地と呼び、ヤマギシズム農法による農業を行っている。その生産物は、全国主要都市に設置されたヤマギシズム実顕地生産物供給所を通じて活用者に供給されている。」(『ヤマギシズム農法』ヤマギシズム生活実顕地本庁文化科編 農文協 一二〜一三頁より要約)

※生まれてくる鶏

鶏は交配すると、母鶏の体質と父鶏の能力を受け継ぐ。

※赤玉鶏

いろいろな種類があるが、一般に白色レグホンより産卵率が低く駄鶏の判別が難しい等の短所がある。しかし、おとなしく飼いやすい、雑食性に富む、肉質が良く卵肉兼用になる等の長所があり、平飼い養鶏に適している。

※白色レグホン

採卵用に改良された鶏で、産卵能力は非常に優れているが肉質はよくない。神経質で餌を選り好みする。平飼いにすると二メートルくらいバタバタと飛び上がってしまう。ケージ養鶏にしか向かない品種。

関西農業養鶏会の思い出

昭和四一年、関西のヤマギシ式養鶏者たちが集まり、関西農業養鶏会を結成し、桜井さんもこれに参加した。協同組合形式で孵化場をつくり、その利潤で会の運営をし、平飼い養鶏の技術交流を目的とした。毎月一回京都に集まり、一晩中しゃべったそうさだ。「それが本音やから、ものすごい、いい技術交流になった。こっちはもう一生懸命吸収したわけ。で、もって帰って自分なりに考えて。」会は、一〇年以上続いた。

思うようにいかないことが多かった。

全販連へは、一〇年近く出荷した。その間に採卵養鶏の卵価は下がっていったが、種鶏養鶏は契約どおりの収入が入った。全販連なら安心して出荷できて儲かるということで、鶏舎を増設し規模拡大をしてみた。しかしその矢先、全販連は採算が取れなくなったことを理由に孵化場を閉鎖してしまった。農林省の方針だった。東京の意向で地方が振り回されたと桜井さんは思った。仲間のほとんどはこの時点で養鶏に見切りをつけてしまった。

#### ・消費者と契約する

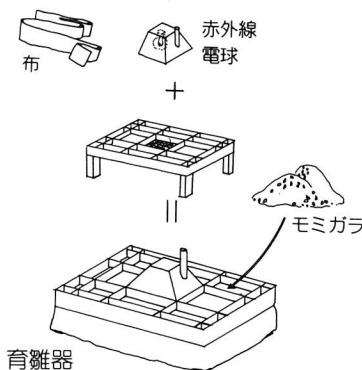
昭和四九年、前述したように使い捨て時代を考える会と知り合った。ちょうど全販連に出荷できなくなつた頃だった。養鶏はやめるわけにはいかないと考えていたし、消費者と結びつけば安定した養鶏ができると考えた。結成されたばかりで実績のない会を直ちに信用することはできなかったが、これは、というひらめきがあつたという。

全販連で共に養鶏をしてきた仲間にこの話を持ちかけたが、いっしょにやろうという人はいなかった。信州から共に入植し、親戚で養鶏仲間でもあつた二人だけが説得に応じ、養鶏を続けてくれることになった。二、三人の仲間が近くにいるとヒナや飼料を注文するのに都合が良いという。

こうして三人は、使い捨て時代を考える会の会員となり、その会の「生産者」となった。三人で採卵養鶏を始め今日に至る。仲間の二人は卵は安全農産供給センターに出荷しているが、野菜は農薬をかけているためそこには出していない。

(2) ヒナを入れる準備

ヒナを入れるのは年に二回。二〇年間、使い捨て時代を考える会に卵を出荷してきた結果、会の他の生産者とヒナを入れる時期をずらすローテーションが出来上り、現在は四月と九月にヒナを入れることに落ち着いている。



① 育雛器具

・育雛器（ブルードー）

育雛器※いくすまきはベニヤ板を利用した手作りで、中央に保温のための一〇〇ワットの赤外線電球が取り付けられる。ヒナは孵化した翌朝やってくる。鶏の体温は四〇度。寒さに弱いヒナにとって育雛器は母鶏のかわりに温めてくれるもの。保温には十分気を付けなければならない。

※使い捨て時代を考える会の会員

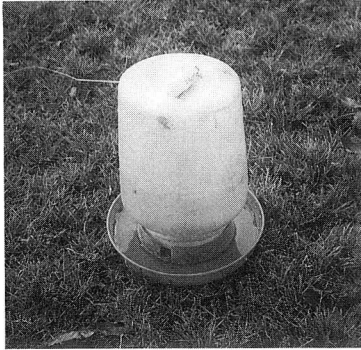
消費者のための会ではないので生産者も会員だ。そこが消費生活協同組合とは違うところだ。

※育雛器

育雛器の上面には保温のためにモミガラを入れる。育雛器をはずした後は床にまく。

・その他

平飼い養鶏の育雛には、平飼いでおすやり方、ケージでおすやり方、幼雛の時は平飼



給水器

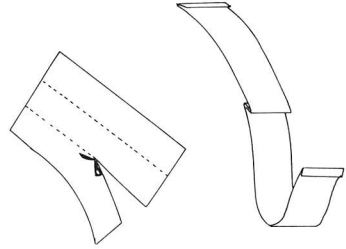
入雛から一か月後、移動させる時まで、ヒナの寝床として重要な役割を果たす。最後にはボロボロになって床のワラと混ざり、堆肥になる。桜井さんは、近隣の農家が長年使っていたムシロを分けてもらっている。ムシロを作る農家が減ってしまったため、何年分ものムシロを納屋にためてある。

・ムシロ

スチック製の給水器を使っている。市販のプラスチック製の給水器を使っている。

・給水器

スチックガードの内側に給水器を二つ置く。スチック製の給水器を使っている。



チックガード

・チックガード

育雛器の周りにトタン平板のチックガードを立てる。

九〇センチ×一八〇センチの板を三枚に切り、端を曲げてつなぎ手を作る簡単なものだ。高さ約三〇センチ。ヒナの行動範囲を制限するためのものだが、ヒナを狙うねずみよけにもなり、保温のためにもなる。

いで中雛からケージに上げるやり方など種々の方法がある。桜井さんはずっと平飼いで育雛するので上記の設備だけですむ。しかしケージ※で育雛する場合はヒナ用のケージが必要になってくるなど、設備費がかなりかかる。

## ② 発酵熱の利用

育雛器の保温には鶏糞堆肥の発酵熱を主要熱源とし、赤外線電球を補助として併用している。ヒナは温度が足りないと言消化不良を起こすが、下からの発酵熱が十分あれば心配ない。堆肥は後にヒナの餌にもなる。

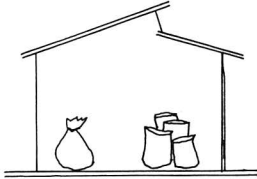
### ・一週間前の準備

ヒナが到着する一週間前に、育雛室へ自前の鶏糞堆肥を運び入れる。二坪ぐらいの面積に広げてならすことのできる量で、二週間は熱が持続する程度、米ヌカの体積の約一五倍くらいだ。この鶏糞堆肥と米ヌカをホースで水をかけながら少しずつ交互に積み重ねてよく混ぜ合わせ、小山にする。

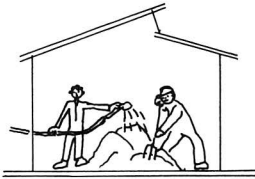
### ※ケージ育雛

ケージに上げようとするのは、主にコクシジウムという病気を心配するためである。ヒナ健康の項を参照。

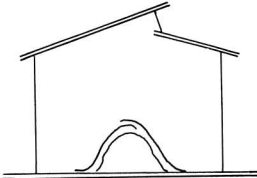
### 〈1週間前の準備〉



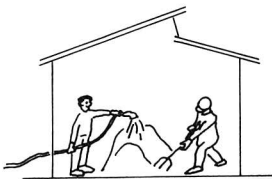
1. 米ヌカと鶏糞堆肥  
を運び込む



2. 水をかけながら混  
ぜ合わせる



3. ビニールシートで  
覆う



4. 翌日、切り返す

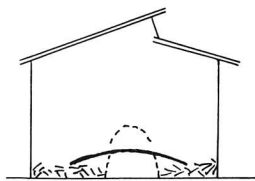
米ヌカの量は約六〇キロ。このやり方を始めた当初は三〇キロぐらいしか混ぜていなかったが、ある程度多く入れたほうが温度が上がるので増やしていった。ヒナの餌にもなるので決して無駄にならない。

水の量もはつきりした数字はわからないが、長年の経験から得た勘で鶏糞堆肥の乾燥具合により判断する。鶏糞堆肥がよく乾燥していれば、かなりの量の水が必要だ。作業が終わったら小山をビニールのシートで覆っておく。

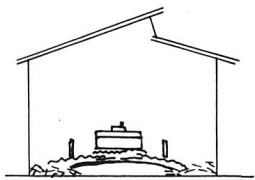
翌日、水分が平均して行き渡っているかを確かめながら鶏糞堆肥を切り返す。水分が足りなかったらさらに水をかける。そうすると五、六〇度の発酵熱が出てくる。再びシートで覆っておく。

一方、ワラ約百束を電動カッターで切り、床に敷きつめておく。

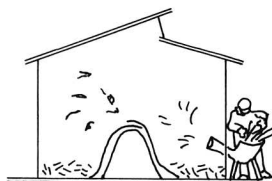
### 〈前日の準備〉



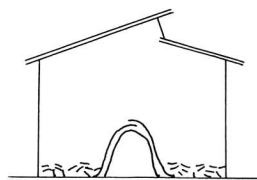
1. 鶏糞堆肥を平らにならす



2. ムシロを敷き、育雛器を置く

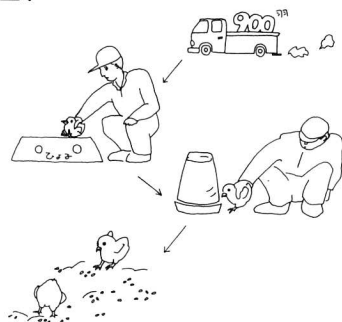
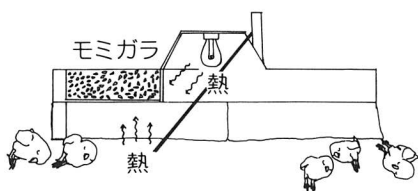


5. ワラを敷きつめる



6. 発酵し、5・60度の熱が出る

### 〈入雛当日〉



小米の上へ降ろす

## ・前日の準備

ヒナが到着する前日、午後から鶏糞堆肥の小山を二坪の面積に真ん中を少し高く広げて、平らにならす。発酵している堆肥からはもうもうとゆげがあがっている。その上に細長い板を育雛器と同じ幅に置く。それからムシロを五枚敷く。鶏糞堆肥の量はこの状態で発熱が二週間持続するくらい必要なわけだ。少なすぎるとすぐに冷えてしまう。また広げるのが早すぎても熱が逃げてしまう。だからぎりぎりの前日まで小山にしておく。温度が低すぎると死ぬことはないが、消化不良をおこしてしまう。

ムシロの中央より奥寄りに育雛器を備え付ける。

「ヒナが来る前日は、やっぱりちよつと、こう、ピンと責任を感じているわな。それまでにきちんと準備せなあかんから。忙しいよね、前日の準備は。何年たったって、三〇年たったって、することはきちんとしておかなければ。」

## ③ ヒナが到着する日

鶏はゴトウ一三〇という品種で、おとなしく、強健で、飼育しやすい。何でもよく食べるので、桜井さんの平飼い養鶏には最適の品種である。

ヒナの注文は養鶏仲間二人といっしょにする。注文先は後藤孵化場。一人三〇〇羽ずつ、合計九〇〇羽のヒナをまとめて孵化場から、近くの石部まで送ってもらい、そこまで三人が毎回交代で取りに行く。石部に運送の集配所がある。集配所まで受け取りに行かずに個別配



達をしてもらおうと非常に経費がかかる。

・水飲み場を教える

朝七時頃、石部に行くヒナはもう着いている。車に積んで家に戻ると一刻も早くダンボール箱から出してやる。一つのダンボール箱には一〇〇羽のヒナが四つに仕切られた中に入れてある。狭いところであばれているので、早く出してやらなくてはと思う。

それでも一羽、一羽、手にとって箱から出す。その時ヒナのクチバシを給水器の飲み口にちよんとつけてから下に降ろす。そうするとどこで水を飲むのかを覚えてくれる。

・夕方のしつけ

その日の夕方はどんなことがあっても側についていなければならない。ヒナは寝るとき、最初に降りた場所に集まる傾向がある。これを放っておくと、ぎしぎしに集まりすぎて自ら圧死してしまう。だから集まりたがるのを追い立てて育雛器の中で寝るようにしつける。

育雛器の中で、ヒナは中央ではなくはじのほうに寝る。もし初日から赤外線電球の下に集

※ゴトウ一三〇

少量の餌ですむ体の小さい品種を選ぶ養鶏家もいる。ゴトウ一三〇は体が大きく餌は多めに必要だが、

廃鶏にしたときに肉を喜んで食べ

てもらえる。そしておとなしく、病気に強い。しかし、大切なのは品種をどう選ぶかより、飼う方だと桜井さんは考えている。

まるようなら、下からの温度が足りないために寒がっているのだ。

一晩無事に寝てしまうと次の晩からは大丈夫だが、用心のため三晩位はついていてやる。初めが肝心で、ちよつと間違つたら一生だめになってしまう。うまく寝ているかどうか夜中にのぞきにいく。ヒナの寝方を観察すれば、暑いのか寒いのか安心していいのかがわかる。

「鶏糞の臭いがしていると、人間がかいだらもう何とも言えん厭な臭い。アンモニアで目がチカチカしてね。でもヒナがかいだらものすごく安心するんだよ。見たらわかるもん。コティンと寝とる。足を上げてこんなして寝ているっていうのは全然警戒心がない証拠。普通はいつでも飛び立てるようにしているでしょ、本能的に警戒しているからね。それがこんなして寝るといふことは、ほんまの親の懐に入ったようなつもりなんだよね。」

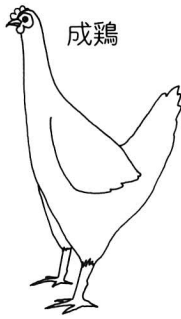
ヒナが到着した時、落ち着くまで一時間ほどダンボール箱のまま置いておく、という考え方もある。しかし桜井さんは、このようにヒナにとって最良の環境は鶏糞の上であると確信しているので、一刻も早く箱から出してやることにしている。

### (3) 育雛

#### ① ヒナの餌

・小米の上におろす

給水器にクチバシをつけた後、ヒナが降りるのは小米こめの山の上である。玄米の状態の小米



成鶏



卵黄消化期

をどっさりムシロの上に置いてやり、好きだけ食べさせる。ヒナはすぐに小米をつつきだす。こうして一番最初に食べるから一番の好物は小米である。台風の後など、ワラが湿ったときは小米をまいてやる。初めは夢中で黙々と食べているが、そのうちワラを掻き回して大騒ぎで食べるので、湿ったワラも乾いてしまふ。

・卵黄消化期

最初の餌付けには種々の方法がある。ゆで卵の黄身を板に塗り付けて与えたり、オスのヒナをゆがいてミンチにして与える方法などを以前は試してみた。ミンチについてはいくらかオスのヒナの有効利用とはいえ、あまりにも残酷でいやになってしまった。

これらの方法はタンパク質中心の現代栄養学からきていると思われるが、孵化してから一二、三日は卵黄消化期といって、何も食べなくても生きていくことができる。ヒナの腹が丸いのは黄身を抱えているからなのだ。それなのに卵黄をさらに与えるのは栄養過多だと桜井さんは考える。

・小米とササの葉

ヒナには最初の三日間、小米とササの葉だけを与える。小米は高価だが、一か月位は続

けることにしている。四日目からはチックフードも与える。

チックフードとは市販のヒナ用の配合飼料である。内容は成鶏用の自家配合飼料と大差なく、主にコーンが入っている。消化をよくするために非常に細かくしてあるのが特徴だ。初めから与えてしまうと、野菜などを消化しない胃になってしまう。

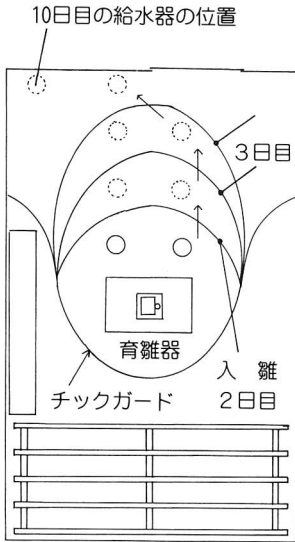
ササの葉の量は、初日は一〇〇羽に対してさかずき一杯で、その後倍量ずつ増やしていく。これを一〇日間続ける。その後ススキなどイネ科を中心とした緑餌を与える。ササの葉は手間がかかるので、初めの一〇日間でやめてしまうが、それでも効果は十分である。

緑餌の量は、二時間ほどでヒナが食べ終ってしまいうくらい。少なめがよい。いつでもあるようではヒナが踏みつけるので、床がべちゃべちゃしてしまふからだ。そして、青いものは、早く食べないとなくなるとい意識が生まれるのか、必死で食べるようになる。

ササの葉は植物の中で最も繊維が硬く、ササロンという蛋白質を含み、それを消化するために胃がよく働くという。ヒナのうちにササを食べさせるとどんな草でも食べる鶏になる。ササの葉を輪ゴムでまとめてよく研いだ包丁で細かく刻む。なかなか大変だが、これをしたと緑餌には見向きもしない鶏になってしまう。幼雛期の餌で一生が決まってしまう。

中雛期からは、成鶏と同じ内容の緑餌を与える。緑餌を集めるのは重労働になりがちだが、鶏がどんな草でも食べてくれるようになるので助かっている。

こうして緑餌を食べることで、自然から薬用効果を受け、病気にかかりにくくなる。また卵の味もよくなる。「医食同源だから」と桜井さんはいう。鶏に限らず人間も健康な体、精



### 〈チックガードの移動〉

神は健康な食べ物からもらうものだとすることを、鶏を飼うことによって学んだ。

### ② 足の訓練

チックガードは、二日ごとに広げていく(図参照)。ヒナが自分で飛び越すまで立てておく。

チックガードを広げることにより給水器を育雛器から離していく。ヒナは体温が四〇度もあるためよくのどを乾かし、一日に何十回も水を飲む。ヒナにとって給水器は非常に遠くにあるのだが、一生懸命、水を飲みに行く。この育雛器と給水器の往復が足のいい訓練になる。三週間もたつ頃には、太くて短い丈夫な足になっている。

### ③ ヒナの健康

ケージ養鶏に比べて平飼養鶏の場合、鶏に体力と抵抗力がついているので病気には強いが、平飼にすることによって起こる病気もある。

平飼いで育雛されているヒナにとって最も心配なのは、コクシジウムである。

「ヒナが鶏糞と共にコクシジウム原虫卵を食べることから感染し、十二指腸内ですい液の作用をうけその卵の殻が破れ、原虫がとびだし腸壁を食べて繁殖する。ヒナは原虫卵を食べてから五、六日たつと発病し、血便が出て、羽をたれ、寒がり、体重は著しく減って、数日のうちに三〇パーセント程度は死んでいく。

予防対策としてはケージに上げて育雛すれば直接糞に接触しないのでコクシジウムは防げ、薬を使わなくてすむ。育雛率は通常高くなるが、育ち盛りの時期を狭いケージに閉じ込めておくので足のひよろ長い鶏になってしまう。

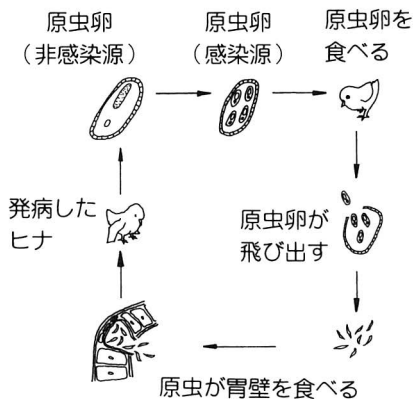
平飼いで通す場合は小群に分けるほうがよい。また高温多湿の環境で原虫卵は非感染源から感染源へと変化するので、環境に気を付けることも必要だ。そして育雛器具や育雛室を水洗・乾燥・日光消毒する。それでも発病したら、獣医にかかりサルファ剤を投薬するか自然治癒力を待つしかない。」(渡辺省悟著『自然卵養鶏』農文協、七二～七五頁より要約)

しかし桜井さんのところではだいぶ様子が違う。三〇〇羽の大群を一ヶ月間平飼いで育雛して鶏糞を食べているのに、育雛率はほぼ一〇〇パーセント。一羽も死なないときが多い。なぜだろうか。

ムシロの下に敷いてある鶏糞堆肥にはうじがわく。そこ、ここに見つけられる程度で、ヒ



ワラいっぱい鶏舎の床



ナにとつては格好の餌だ。ムシロをずらすとそこへヒナが集まって来てうじと鶏糞をつつく。こうして鶏糞を食べることを通して、哺乳動物が母乳で抗体を受け継ぐように、ヒナは前の鶏の抗体を受け継ぐのではないかと桜井さんは考える。

以前、全販連の獣医にこんな不衛生な育雛環境はよくないと指摘され、指導に従って育雛室を消毒し、鶏糞を与えないで育雛したところ、コクシジウムの他、マアレック氏病、コレリザ、ぶどう球菌がでて悲惨な状況になったことがあった。

鶏糞をヒナに食べさせるようになってからのこの二〇年間、一度も抗生物質を使うような病気にかかったことがないという。

#### ④ 止まり木

育雛室の中には一番奥に止まり木が設備されている。これは鶏舎のどの連(部屋)にも共通である。

入雛から一ヶ月後、これまでは育雛器の中で寝るようにしつけていたのにかわり、止まり木の上で寝るようにしつける。圧死を防ぐためであり、鶏の習性で高い所で寝るほうが自然でもあるからだ。

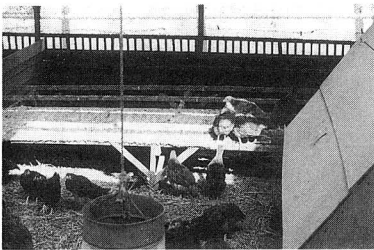
しかし、急にしつげが変わるので、ヒナはすぐには対応できない。まず、ムシロを止まり木のすぐ手前に移す。それからムシロを止まり木の上に乗せ、徐々に覚えさせる。なかなか上にならないヒナはササの葉で追いつける。そして全てのヒナが止まり木の上で寝るようになったらムシロを取る。これは大切なことなので、移行期間中は夜何回も見に行くようにしている。

### ⑤ 移動は一回

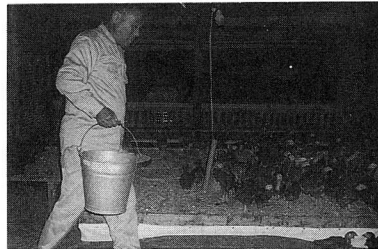
鶏舎の都合でやむを得ず一回だけヒナを移動させる。入雛から一ヶ月後、三〇〇羽を一〇〇羽ずつの連に分ける。それから<sup>はいけい</sup>廃鶏にされるまで二年間、同じ連で一生をおくる。

鳥類は縄張りの習性が強いので、環境を変えられるのを非常に嫌がる。また寝場所が変わると、どこで寝ていいかわからなくなり、一ヶ所に密集して圧死してしまう危険がある。

そのため細心の注意を払って移動させねばならない。一〇〇羽は育雛室に残し、あとの二〇〇羽を二つの空いている連に移す。一番よく寝ていた中央あたりのムシロを二つの連の止まり木の上に乗せる。その上に野菜出荷用のコンテナを伏せて置く。



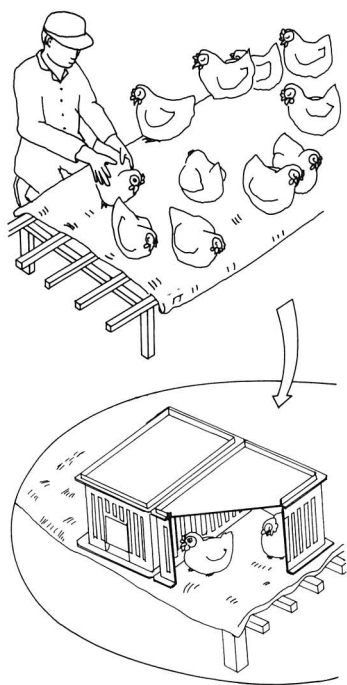
止まり木



ムシロを育雛器の上のせて移動の準備



夜、移動させる



コンテナを伏せて置く

(4) 成鶏

① 鶏糞堆肥

一度移動させてから廃鶏にするまでの二年間、鶏糞を一度も外へ出さない。

夜暗くなりヒナの眼が見えなくなつてから、一羽、一羽、手でそつと運んで、コンテナの中に入れる。ヒナが落ち着いてから静かにコンテナを取り外す。やはり、二、三日はササの葉で追い立てたり、夜、見に行つたりする。

床には、自分の家の田で採れたワラが約三〇センチの厚さで敷かれている。約三〇平方メートルの連に敷かれる量は、一反歩分の田から採れるワラの量と同じである。鶏糞はこのワラと混ざり微発酵して、ポロポロの完熟堆肥になる。

廃鶏にした後この堆肥を袋に入れて畑の肥料にするわけだが、育雛のための発酵熱にもこの鶏糞堆肥を利用する。

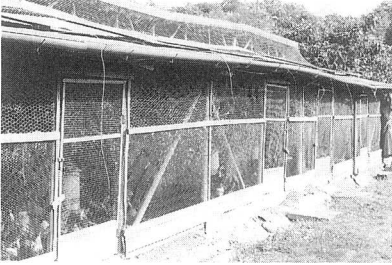
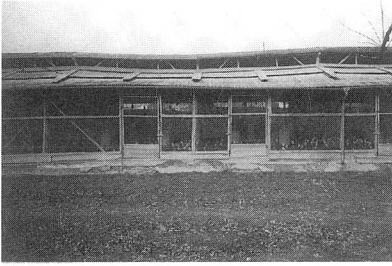
## ② 鶏舎の構造

鶏舎は、カマボコ型のヤマギシ式鶏舎。昭和三九年にヤマギシ会の人に三連だけ建ててもらい、後は独力で、または仲間と共同で増築していった。現在一一連ある。木造平屋建て、前面と後面が金網張りで天窓が中央にある。一連の間口が三メートル六〇センチ（二間）、奥行きが八メートル六〇センチ（四間半）、約三〇平方メートル（九坪）の広さがある。

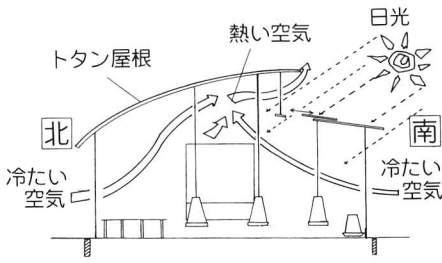
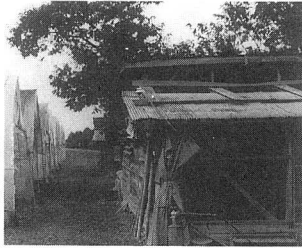
中央の天窓は雨のときは閉めることができる開閉式で、二つの役割がある。一つは床を日光消毒するため。一年を通してまんべんなく日が当たるように設計されている。日光は空気を好む好気性細菌の繁殖に重要である。

もう一つの役割は換気である。屋根がトタン板でできているため、太陽光線が当たるとすぐに熱い空気が上部にでき、天窓からどんどん外へ出ていく。すると冷たい空気が下から入ってきて対流が起こり、鶏舎の中の空気はいつも新鮮で、鶏糞を堆積させても臭くならない。

鶏糞の量は一日約一〇〇グラム。これは人間とほぼ同量だ。一〇〇羽の鶏が九坪の連で糞



鶏舎



③ 餌やり

・自家配合飼料と緑餌

一日一回、日没二時間前に餌をやる。だから夏と冬とではずいぶん時間が違ってくる。与えるのは自家配合飼料（表参照）。天井から吊つてある餌入れに入れてやる。分量は、朝八

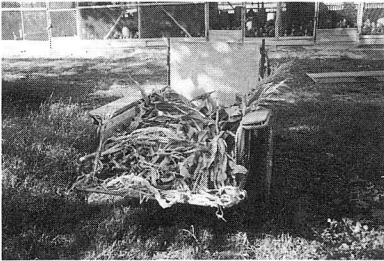
をたれ流すのは、一〇〇人の人間が同様のことをすると同じだそうだ。それなのに悪臭が生じない。そのためには、鶏舎の構造の他に切れ餌えという工夫があるが、それについては後でふれる。

時の状態を見て決める。一連一連まわって卵を取りながら前日の餌の残り具合を見る。きれいに食べ切っていたらその日は十分やり、食べ残していたらすつと減らす。

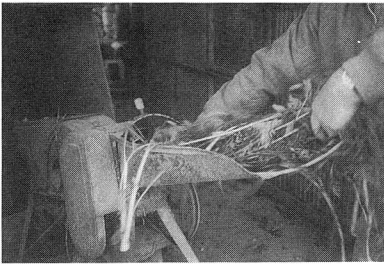
業者の配合飼料と違うところは、生ヌカが入っていること。生ヌカは、非常に良い飼料だが発酵しやすいため、これの入った配合飼料は一週間しかもたない。だから業者は混ぜることができない。また業者の配合飼料には防腐剤や色素（卵黄に色をつける）が入っている。一日一回の自家配合飼料の他に毎朝緑餌をたっぷり与える。緑餌はデザート的で飼料とし



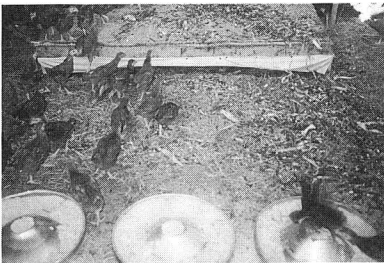
土手の草を刈る



緑餌にするトウモロコシの茎と葉



電動カッターで緑餌を刻む



緑餌に急ぐヒナたち

自家配合飼料 配合表 (単位：キ口)

	中雛用	大雛用	成鶏用
二種混合飼料	140	140	160
大豆粕	10	20	20
魚粉	20	0	15
コメヌカ	60	60	60
カキガラ	5	5	5
モミガラ	5	20	7
クソタン	2	2	2
アルファルファミール	3	3	3
タン酸カルシウム	3	3	3
リン酸カルシウム	2	2	2
食塩	少々	少々	少々
小米又は小麦	10	10	10
合計	260	265	287

- ・大雛期には産卵開始を遅らせるために動物タンパクは与えない。そのため魚粉は0にする。そのかわりに大豆粕とモミガラの量を大幅に増やして、量を保つ。産卵開始を遅らせる方法として飼料の量を三分の一にするやり方もあるが、戦時中に飢餓を体験したことから、鶏を空腹にするのはいやな気分になる。
- ・二種混合飼料（トウモロコシに魚粉を混ぜたもの）と大豆粕は輸入に頼らざるをえない。現在、日本は穀物飼料の90%を輸入に頼っている。国産の飼料では10倍以上の価格差があるため、趣味程度（約50羽）の規模でしかやりきれない。安全性を考えて自家配合にしても、配合するそれぞれの飼料の素性を明らかにすることは非常に難しい。日本の平飼養鶏の限界と言える。
- ・クソタンは、モミガラでできていて、民間療法として腹痛に効く。そして魚粉の臭いを消す作用がある。栗東農協から買ってくる。
- ・カキガラは貝のカキの殻。
- ・食塩は入れなくてもいいという人もいる。しかし、草食動物は食塩を欲しがるので（例えば牛は、岩塩をなめる）一掴みか二掴みほど適当に入れるようにしている。
- ・小麦と米ヌカは自家生産している。小米は一部自家生産で不足分は知合いの農家から買っている。

ては考えないが、自家配合飼料だけではどうしてもビタミン類が不足してしまつたため、とても大切だ。

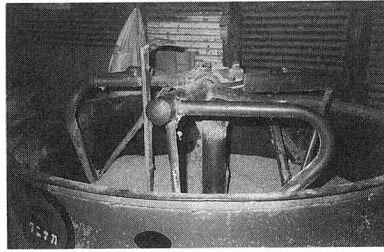
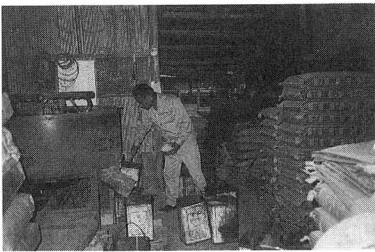
朝七時頃、草刈機を使って畔草を刈る。また、畑の野菜から出たクズ、例えばネギのはかま、タマネギの赤葉、ニンジンの育ち過ぎた葉などを電動カッターで刻む。刻んでいると野菜や草のいいにおいが辺り一面に広がる。一羽当たり六〇グラム位が目安で、すぐ食べてしまふ程度にする。

そして声をかけながら一〇〇羽が一斉に並んで食べられるように床に広くばらまく。鶏は緑餌が大好きで、まかれるそばからわれ先に食べる。

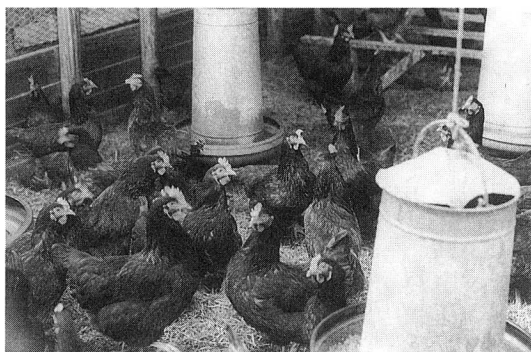
雨の朝は、どうにも億劫おっろで怠けたくなる時もある。しかし怠けてしまうとその日は鶏舎の前を通るたびに鶏がワーワー寄つて来て緑餌の催促するので、何とも言えない嫌な気分がする。それが我慢できなくなつて緑餌を与えると、鶏も落ち着くしホツとする。

### ・切れ餌とその効果

餌のない時間をつくることを切れ餌という。幼雛のうちはいつも餌を食べられるが、中雛のときから餌の無い時間を徐々に



自家配合飼料



群れが揃う

長くしていく。大雛だいすちになったら思い切って長くする。一般に成鶏になっても常に餌箱に餌を入れておくやり方があるが、それと比べて切れ餌には三つの重要な効果がある。

第一に鶏が運動すること。鶏は空腹になると餌を探すためにワラを掻き回す。そうするといい運動になるから更に腹をすかす。そしてもっと餌はないかと更に一生懸命掻き回し運動する。

第二に好気性細菌の繁殖しやすい環境ができること。

ヒナの時の小さい鶏糞はすぐ乾燥してワラと混ざり乾燥剤のような役割をしている。そこへ鶏がワラを掻き回すことによって空気を好む好気性細菌が繁殖し、ワラと鶏糞の微発酵がすすむ。「人間が掻き回すよりもっとこまめに掻き回す。人間よりずっと上手。」好気性細菌は嫌気性細菌のような悪臭を生じないので、鶏舎は臭くならない。これが空気の対流の他に鶏舎の中が臭くならないようにするためのもう一つの工夫である。

第三は、群が揃うことだ。切れ餌によって運動して空腹になった強い鶏は粒餌、粉餌の選り好みをせず、とにかく食べる。同じく空腹な弱い鶏も強い鶏に遅れまいと必死になって食べる。だから群がでこぼこしなくなる。

弱い鶏にたくさん食べさせてやろうと思つて餌箱にいつも餌を入れておくと、強い鶏が栄養価の高い粒餌だけを選んで食べてしまう。そして肥満体になり産卵しなくなる。弱い鶏は残った粉餌ばかりを食べることになり、ガリガリに痩せてしまう。

桜井さんは、鶏を飼つていて飽食はよくないということが身にしみてわかっている。現代の人間は飽食で健康を害している、腹八分目でバランスよく食べれば成人病はなくなるとよく話す。

#### ④ 尻つつき対策

桜井さんの養鶏法の中で最大の特徴は、尻つつき対策である。

鶏は群にしておく尻つつきをする。大雛期も後半になると、他鶏の毛や羽根を食べ始め、トサカの赤い部分をつつきだす。そして血が出たら、その一羽に全部の鶏が襲いかかり、尻をつついて腸を引きずり出してしまふ。わずか五分ばかり鶏舎を離れて戻ってみると、また一羽やられているという具合に、あつという間のことだそうだ。可愛がつている鶏がどうしてこんな「いじめ」をするのかと、どう仕様もなくがっかりしてしまふ。

「これは平飼いの宿命とさえ言われており、羽数が多いほど被害も大きい。初産前後が多く、老鶏にはでない。春先から夏にかけて風の強い乾燥した日にでる。原因は密飼、明るすぎることで、繊維不足や水、餌を切らすことが誘因になる。

通常の子防対策としては、前記の原因、誘因を取り除くこと。またデビークといって電熱



刃でクチバシを焼き切る方法がある。デビークは、四〇日齢くらいまでのヒナのうちにやる  
とストレスが少くすむ。」(『自然卵養鶏』、八二頁より要約)

以前はこの尻つきにはずいぶん頭を痛めた。種鶏養鶏の時代には「当然、デビークはす  
るもの」と思い、実行していた。尻つっきの原因はそのままにした「臭いものには蓋」的な  
対処の仕方である。

使い捨て時代を考える会の会員になり採卵養鶏を始めてからは、鶏を自然に飼いたいと考  
えデビークをやめた。しかし、一連に一〇〇羽という大群ではどんどん尻つっきが出てしまっ  
た。何とかならないものかと種々の養鶏書を読みあさり、赤土、腐食土等を試してみたが効  
果は現れなかった。

ところが、やっぱり駄目かとあきらめかけていた時、尻つっきの最も多発する時期が春先  
の青草の出始める前だということに気がついた。そして、雑草の硬い繊維に関係がありそう  
だと考え、モミガラ給与を始めてみた。これが成功したのだ。

モミガラの繊維は非常に硬く、糞を見てみると消化されないのでそのまま出てきているのが  
わかる。繊維も消化するようなものでは効果はなく、大根の葉ばかりを与えていても尻つっ  
きはでる。消化しない繊維が必要なのだ。

モミガラは、毎日自家配合飼料に混ぜて食べさせる。中雛の頃から与え始め、大雛になる  
と相当多く餌に混ぜる。そして一生与え続けることによって尻つっきは解消することができ、  
デビークをする必要がなくなる。クチバシを切られていない鶏は、かぼちゃなどの硬い野菜

を塊のままつついて食べることができると。

尻つつきが出てきたら繊維不足。尻つつきは、繊維が足りているかを知るバロメーターだ。桜井さんは、こうして繊維不足が鶏の性格を変えることを知って、同じことが人間社会にも当てはまるのではないかと考えている。昔はなかった校内暴力やいじめの問題が、現代の食生活に食物繊維が不足していることに関係している。繊維が不足すると人間もイライラするからだ。もっと多く野菜を食べたり、玄米を食べることが必要だと話す。

### ⑤ 暑さ対策

鶏は寒さに強く、暑さに弱い。夏の猛暑には死んでしまうこともある。鶏には汗腺がないので、一度でも二度でも温度を下げてやるのが大切だ。

暑い時の鶏は、羽を動かしたり、ワラの中にもぐって体を冷やしたりする。あまり暑い時はホースで水をかけてやる。すると初めはびっくりするがとても喜ぶ。水をかけてもらった後、砂浴びをするので喜んでくれるのがわかる。

鶏舎は、四方を草で囲まれている。草は熱を吸収して温度を下げてくれる。逆に周囲がコンクリートやアスファルトの場合、照り返しで高温になり、よくない。

### ⑥ 季節の野菜

鶏舎は自宅のすぐ裏にあり、家族みんなが鶏舎の前を歩き来する。そしてその都度、台所



肩にのるヒナたち

から出た野菜クズなどを鶏舎の中に放り込んでやる。そうすると季節の野菜を一年を通して与えることになるし、鶏とのコミュニケーションがとれる。

鶏舎が人家から遠く離れた山の中にポツンとあるようでは、養鶏はうまくいかない。家族が鶏が嫌いでも全く手を出さないのも、成績が悪くなる原因になる。

家畜がなついてくるように、世話をすることが大切だ。餌を与える時はヒナにはピヨピヨ、成鶏にはトートーと必ず声をかける。鶏たちは桜井さんの声を覚えていて声が聞こえる時は非常に安心する。鶏舎の中に知らない人が何人か入ってきても平気で餌を食べ続けるし、桜井さんの腕や肩に乗るばかりでなく、好奇心から誰にでも寄ってくる。

## (5) 卵

### ① 産卵

#### ・タンパク質

大雛の時に自家配合飼料の中の魚粉を減らし、大豆粕とモミガラを増やす。タンパク質が多いと早熟にな

り産卵が早くなるが、卵が非常に小さい。タンパク質を減らすことによって産卵を一日でも二日でも遅らせ鶏の体ができあがるのを待つ。それが良い卵を産んでもらうことにつながるし産卵の持続性を高める。

三〇〇羽が揃って産卵するようになるまでにだいたい五、六ヶ月かかるが、その年によってずいぶん違う。

#### ・点灯はしない

一般に日の短い冬の間の産卵率を上げるために点灯をする。明るいと脳下垂体の性腺刺激ホルモンが刺激されて卵を産むようになる。しかし点灯して多く産ませることで殻が薄くなったり奇型がでてきたりしたため、数年前から点灯をやめた。産卵率は下がったが、良い卵を産むようになった。また、産卵率を無理に上げたりしなければ、その分栄養が肉にまわり、廃鶏をおいしく食べられる。

#### ・産卵箱

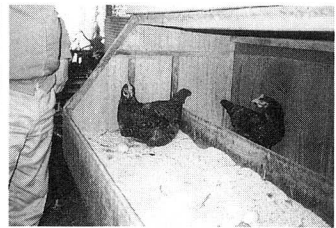
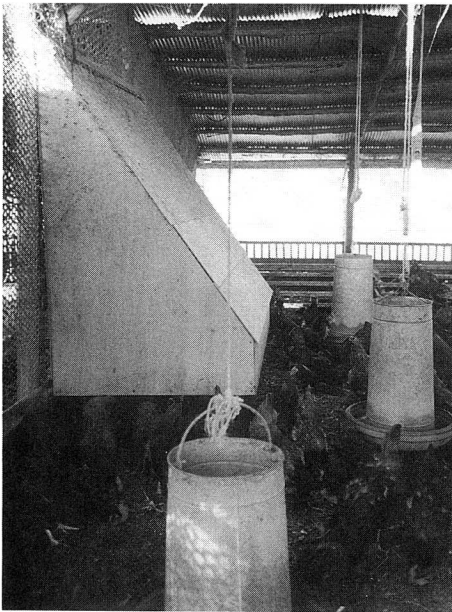
産卵箱は、ヤマギシ式に手を加えたものである。ヤマギシ式は、入り口が前面にあり、そこから採卵もするようになっていて、内部を暗くするために黒い幕が取り付けられている。鶏は暗いところだと安心して産卵できるからだ。

夏の暑い時に幕が腕にふれると気持ちが悪く、腰を曲げな

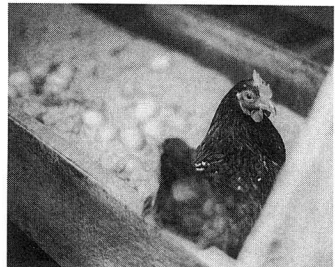


がらでは卵が採りにくい。そこで、前面上部の板を開閉できるように改造して、採卵しやすくした。箱の裏側に入り口があり、そこから内部に少し光が入り込むようになってい。そして床の上に据え付けてあったのを壁にかけた。その分の床面積を広くするためだ。少しでも床面積を広く使用することは、連の中に入れられている百羽の鶏にとって大きな意味がある。

最初に卵を産むときは、産卵箱の外に産む鶏がだいぶいる。そこでそうさせないために卵が産んであった場所の様子を物置いて変えておく。すると、そこでは産まなくなる。これを繰り返すうちに全部の鶏が産卵箱で産むようになる。



産卵箱



## ・採卵

朝、緑餌をやるとき、昼そして日没二時間前の自家配合飼料をやるときの三回、採卵をする。一日に何回も採るところで卵はよごれず、きれいなまま出荷できる。特に夏は、割れたらすぐに腐ってしまうのでいっそう気をつける。

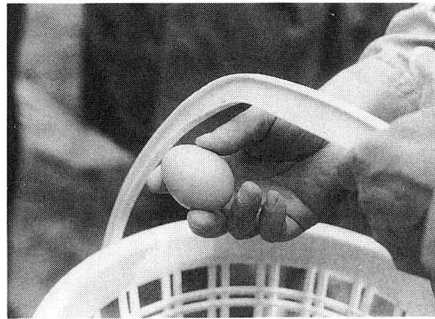
## 採卵

## ② 卵価

産卵率は年間を通して六割から七割ぐらいになる。一個二五円ぐらいで、使い捨て時代を考える会の安全農産供給センターに出荷している。

会の他の生産者からは、卵価を上げてほしいという声が出ていているが、桜井さんは消費者の立場を考えて反対している。スーパーでは一〇円の卵が売られているのに、三〇円以上の卵を消費者が買い支えてくれるだろうか。せつかくいい卵でも売れなくなってしまったら、どちらが強いかというと消費者である。生産者は弱い立場になってしまう。しかし、生産者が消費者の立場を考えるには、生産者にある程度の経済的な余裕が必要である。そこが難しいところだと考える。

確かに餌代、労力のことを考えると養鶏による収入は十分とは言えない。しかし鶏糞の完熟堆肥を畑に入れ、サツマイモの蔓やネギのはかま、モミガラなどを鶏の餌にし、稲ワラを





出荷の準備

鶏舎に敷くことができる。このように循環型の農業の一環として養鶏は重要な位置を占めている。

「循環が農業の基本なんだから。自然との関わりをもてばもつほど循環ということが頭に入ってくる。」

### ③ 淘汰

鶏の産卵寿命は割り合い長く、一〇年も産み続ける鶏もいる。しかし、年をとると産卵率は下がり体力は落ちて休産が多くなり、卵質も低下する。そうすると採算が合わなくなるので淘汰（廃鶏処理）することになる。

安全農産供給センターでは廃鶏も扱っているが、春と秋、全部の生産者から一度に集まってくると処理場が少ないため処理しきれず、困ってしまう。羽数も会員の消費量を上回っている。

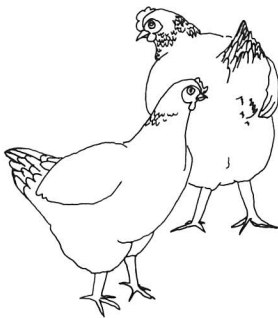
そこで廃鶏はなるべく生産地で処理してほしいという方針をとっている。そしてそれができない場合は、安全農産供給センターが会員に供給することになっている。

桜井さんのところでは、近所の人淘汰する時期を知っていて買いに来るほか、大部分は知合いの建設会社を買ってくれる。社員が家族といっしょに来て、鶏を絞め、湯がいて羽を

むしり持って帰る。そのときにみんなで宴会をするのが春と秋の行事になっている。二年で淘汰すること、肉の味をよくするために最後に米を与えること、点灯なしで無理な産卵をさせないことが喜んでもらうための工夫だ。今の柔らかい鶏肉に慣れている人には硬いが、昔の味を覚えていた人には好評だ。

幸いこの収入で次のヒナを購入することができる。しかし、一般に廃鶏として出荷した場合には、値段は非常に安く次のヒナを買うのには不十分だ。この他に輸送費なども負担しなければならぬ。

## まとめ



日本の農業の危機が言われるようになった。工業と同じような生産性を農業に求めた結果ではないだろうか。いったい工業と農業は同じ土俵に立てるものなのか。根本的に間違った

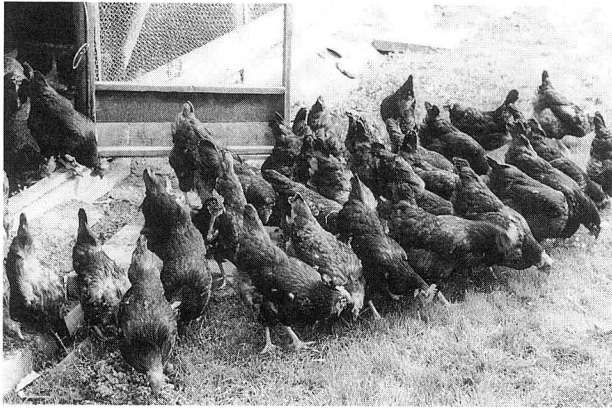


ことを農業に要求してきたのではないだろうか。

「金勘定するんだったら、農業はだめです。自然に近いほど金とは縁が少なくなってくる。農業の場合、なぜ儲からないのかと考えたら、自然の恩恵をこうむってできているからです。わしがこうしておたって伸びているでしょ。それが恩恵なんですよ。そのかわりどんなに二四時間働いたって、もっと伸びてくれと言ったって、伸びませんよ。それが自然の制約なんです。気象条件と土壌と作物の性質は人間の力では、どうにもならないでしょ。だから農業は金勘定には向かないんです。」

専業農家は、経営が厳しい時代だ。しかし自給体制をとれば収入が少なくなる分、支出も少なくてすむ。国際競争にも参加する必要がない。

「確実に自給して、うちのような形態をとれば、ずっと生き延びられると思うな。自給を嫌がる人も多いですけどね。だけどこれからの農業は、おそろくうちのような形態でなかったら、まず生き残れんだろうね。一軒でもうちのような農家が増えていってほしいと思う。」



舎外で草をつつく

発刊に当たって

持続可能な社会については今日多くのスケッチが提出されています。日・米・西欧などの諸国がマイナス成長へと転換すること、豊かさの基準を営利ではなく、一人一人の持てる自由時間に置くこと、そのためにライフスタイルを変えることなど。

スケッチは沢山ありますが、そこに向けて進む道筋は明らかではありません。すぐ手をつけられるようなプランもありますが、しかしわざ事を始めると、道に迷ってしまうことがよくあります。到達点はかろうじて描き出されていても、そこに到る道は迷路となっているのです。私たちはこのような現実が人々を支配する「何ものか」によってもたらされていると考えています。「何ものか」に導かれてしまうからこそ、平坦な道さえも迷路になってしまうのではないのでしょうか。

持続可能な社会を求めるとき、この「何ものか」を制御できるかどうかが問題でしょう。この制御は知識の領域だけでは手に負えず、知恵を大事にし、知識の一人歩きを防ぐ新たな文化を形成していくことによらなければならぬでしょう。そこで経験やパフォーマンスを共有するための伝達のネットワークを創り出すことを願って、「ゆい双書」を刊行します。シリーズの刊行が進むにつれて、そのメッセージも鮮明になっていくことでしょう。

<ゆい 双書：持続可能な社会を求めて 1>

にわとりと共に生きて — 開拓農民桜井昭人さんの想い—

1993年11月21日 第1刷発行

定価800円  
(本体777円)

著者 鈴木 勇子

美術 三木 千種

発行所 スペースゆい 電話・FAX 075-213-3583 郵便振替 京都5-16907

〒604 京都市中京区新橋町通竹屋町上ル西草堂町178

印刷 株式会社万里印刷

Printed in Japan



# にわとりと

発行 スペースゆい  
定価800円(本体777円)

# 共に生きて